

⑨ 日本国特許庁 (JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭58—49051

⑪ Int. Cl.³
H 02 K 1/10

識別記号

庁内整理番号
7509—5H

⑬ 公開 昭和58年(1983)3月23日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 2 頁)

⑭ 直流機の補極

① 特 願 昭56—146132

② 出 願 昭56(1981)9月18日

⑦ 発 明 者 松井孝行

日立市幸町3丁目1番1号株式
会社日立製作所日立研究所内

⑦ 発 明 者 田原和雄

日立市幸町3丁目1番1号株式
会社日立製作所日立研究所内

⑦ 発 明 者 竹村明

日立市幸町3丁目1番1号株式

会社日立製作所日立工場内

⑦ 発 明 者 齊藤啓自

日立市幸町3丁目1番1号株式
会社日立製作所日立工場内

⑦ 発 明 者 岡田敏彦

日立市幸町3丁目1番1号株式
会社日立製作所日立工場内

① 出 願 人 株式会社日立製作所
東京都千代田区丸の内1丁目5
番1号

④ 代 理 人 弁理士 高橋明夫

明 細 書

発明の名称 直流機の補極

特許請求の範囲

1. 薄鉄板を積層した補極鉄心と、この補極鉄心に巻装された補極線輪と、この補極線輪を保持し、かつ前記補極鉄心の両側面に溶接にて固着され、横層方向に所定の間隔をもつて配置された複数の支持金具とを備えた直流機の補極において、前記両側面の支持金具を、夫々対向しないように配置したことを特徴とする直流機の補極。

発明の詳細な説明

本発明は直流機の補極に係り、特に補極鉄心、補極線輪及び補極線輪を保持する支持金具からなる直流機の補極に関するものである。

直流機の補極の従来例が第1図及び第2図に示されている。同図において1は薄鉄板を積層した補極鉄心、2は補極鉄心1に絶縁板3及び対地絶縁層4を介して巻装された補極線輪、5は補極線輪2を保持し、補極鉄心1の両側面に溶接部6で固着され、横層方向に所定の間隔をもつて配置さ

れた支持金具である。この支持金具5は補極線輪2の脱落を防止するようにしたものであるが、従来は積層鉄心1の積層方向の両側面に夫々対向して配置されていた。

ところでこのように支持金具5が対向配置されていると、支持金具5は溶接部6で補極鉄心1に取り付けられているので、この対向配置された支持金具5間が短絡されるようになり、電気的な短絡回路が形成される。短絡回路が形成されるとこの部分を通ずる磁束は負荷急変に速やかに追従することができず、補極磁束の負荷電流への追従特性を悪化させ、ひいては直流機の整流状態を悪化させる懸念があつた。

本発明は以上の点に鑑みなされたものであり、その目的とするところは、補極磁束の負荷電流に対する追従が良好な直流機の補極を提供するにある。

すなわち本発明は、両側面の支持金具を夫々対向しないように配置したことを特徴とするものである。

荷電流に対する追従が良好な直流機の補極を得ることができる。

図面の簡単な説明

第1図は従来の直流機の補極の側面図、第2図は従来の直流機の補極の正面図、第3図は本発明の直流機の補極の一実施例の正面図である。

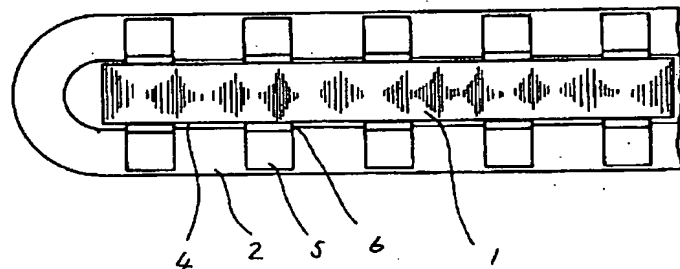
1…補極鉄心、2…補極線輪、5a、5b…支持金具。

代理人 弁理士 高橋明雄

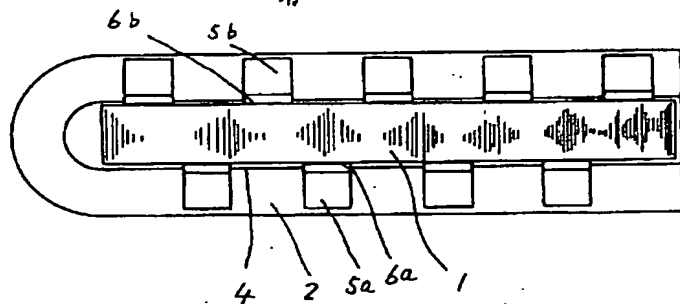
以下、図示した実施例に基づいて本発明を説明する。第3図には本発明の一実施例が示されている。なお従来と同じ部品には同じ符号を付したので説明は省略する。本実施例では両側面の支持金具5a、5bを夫々対向しないように配置した。すなわち支持金具5aと5bとを溶接部6a、6bで補極鉄心1の両側面に夫々接続固定したが、支持金具5aと5bとが対向しないように交互に配置した。このようにすることにより、支持金具5aと5bとは対向配置されないで、この支持金具5a、5b間に電気的な短絡回路が形成されなくなる。従つて補極鉄心1を通過する磁束は、一様に負荷急変に対して速やかに追従することができ、直流機の整流状態を良好にすることができる。

上述のように本発明は、両側の支持金具を夫々対向しないように配置したので、両側面の支持金具は対向配置されなくなつて、支持金具間に電気的な短絡回路が形成されなくなつて補極磁束の負荷電流に対する追従が良好となり、補極磁束の負

第2図



第3図



第1図

